

日本沿岸域学会 研究グループ 研究計画提案書

平成24年3月15日

① 研究テーマ	ベトナム南部沿岸域の災害脆弱性の評価と防災啓発						
② 目的	<p>ベトナムは、1986年の改革開放路線以来、海外からの旺盛な投資も後押し、順調な経済成長を遂げてきている。地形的には、南北に伸びる全長 3,260km の長大な海岸線を有するため、沿岸域に拠点をもち海運、水産、工業、観光等に従事する労働人口が多く、このため沿岸域の人口比率が高い。しかし、近年の沿岸域開発の急速な進展に対して、沿岸域防災の面での対応は遅れているといわざるを得ない¹⁾。ベトナムが今後健全な経済発展を実現するためには、沿岸域災害に対する着実な備えを進め、安全性の高い生活基盤、経済基盤を形成していく必要がある。特に、ベトナム南部沿岸域は台風の上陸が希であることもあり、沿岸域災害に対する危機感も小さく、海岸線近くの低平地に住居が密集する状況も珍しくない。ベトナム南部と同緯度帯に位置するフィリピンのミンダナオ島では2011年12月に熱帯低気圧 Washi が上陸し、土砂災害や洪水によって1,250人以上の死者を出した。ミンダナオは台風常襲国フィリピンの中にあつて、これまで台風の脅威と無縁と考えられていた。ここにベトナム南部との類似性を見出すことができる。本研究では、ベトナムの南部地域を対象として、現地調査や数値解析など各種分析に基づき、当該地域の沿岸域災害の脆弱性を検証し、その研究成果をベトナムの研究者や行政関係者と共有することで、想定外の災害に備える重要性について啓発していく。</p> <p>1) 高木泰士, Nguyen Danh Thao, Le Van Cong: 高い経済成長の渦中にあるベトナムの沿岸域開発の現状, 沿岸域学会誌, Vol.21, No.4, pp.113-122, 2008.</p>						
③ 活動内容	<p>活動序盤にグループメンバーでメール協議を行い、各研究者のこれまでの知見を集約し、具体的な研究計画を策定する。現時点では主な調査対象地として急速に開発が進む海岸都市ファンティエットおよびメコンデルタの中心都市カントーを想定しているが、活動エリアは柔軟に拡げていく方針である。活動中盤では、対象地の災害脆弱性を評価するために地形測量や住民インタビュー等の現地調査を行う。活動終盤では大学研究者や行政関係者を集めたセミナーを開催し、成果の共有を通じて、防災の重要性を啓発していく。なお、2回程度の現地調査を予定しているが、費用については本研究予算の他、別予算も活用する予定である。</p>						
④ グループの構成	氏名	会・非	専門分野	所属・役職	住所	電話番号	FAX番号
世話人 グループ構成員	高木泰士	会	海岸工学 国際開発	東京工業大学大学院理工学 研究科国際開発工学専攻・ 准教授			
	Tam Tran Thu	非	海岸工学	ホーチミン市工科大学土木 工学部・港湾海岸工学科・ 学科長			
	Nguyen Danh Thao	非	海岸工学	ホーチミン市工科大学・国際 部・部長			
	Tran Van Ty	非	河川工学	カントー大学・土木工学科・ 講師			
	Mai Chi	非	都市計画	農業農村開発局・副局長			
	Miguel Esteban	非	海岸工学	早稲田大学理工学術院国際 教育センター・講師			
	Hanne Louise Knaepen	非	気候変動 政策	京都大学地球環境学舎地球 環境学専攻・博士課程			
	Mitsuko Lilian	非	国際法	国連大学・プログラムオフィサー			
	三上貴仁	非	津波工学	早稲田大学大学院創造理工 学研究科・博士課程			
⑤ 日程表	研究期間	平成24年6月～平成26年6月		開催頻度	ベトナムにて計2回程度の会合／メール協議は随時実施		
	開催場所	ベトナム 候補地／ファンティエット市, カントー市		⑥ 研究運営費			

※②は必要性及び期待される事項についてもご記入下さい。③は研究方法・手段について具体的にご記入下さい。④はグループの構成員総てについてご記入下さい。「会・非」については、会員・非会員の区別をご記入下さい。また、公募を希望する場合は、公募も含めた合計人数をご記入下さい。⑥は希望額（60万円以下）をご記入下さい。

以下は記入しないで下さい。

受付日	平成 年 月 日	研究モード	-	備考
-----	----------	-------	---	----